＜今日の説教のポイント　ルカによる福音書15章11-24節 ＞

１ 聖書の神様はどんな方かを知ることができる「放蕩息子のたとえ」

戦争、格差社会、温暖化など、これから先に希望を抱けない人も多い今の時代。そんな中で初めて聖書に聞いてみようと思われる方も多いと思います。「放蕩息子のたとえ」はそのような時に最適な話です。例え話ですから何を伝えようとしているかを聞き取ることが大事で、これは「神様はどんな方か」を示そうとしている話です。

２（11-16）私たち人間と世界の姿　その１　絶望に向かう道。

この部分は、私たちが将来に希望を持てなくなってもおかしくない理由を示しています。放蕩息子は自分の財産を生前分与してもらうのは当然だと主張し、自分のために使い果たします。その間は楽しいに違いないでしょう。しかし、無くなると、それまで彼に機嫌を取っていた人たちは誰もいなくなり、死の一歩手前まで至ったのです。これは誰かある人のことだけでなく、今の世界全体が直面している状況でもあり、抜け出せる希望が見出し難くなっている点も同じです。

３（17-21）私たち人間と世界の姿　その２　希望に方向転換する時。

その時に気づくべきについてここで伝えようとしています。「我に返る」(17)の意味が、父親（神様！）の下で受けていた恵みの大きさに気づくことである点が大事です。自分ではどうすることもできなくなった時にその状況を打ち破るのは、自分ではない何かによる救いがあることを見出した時だからです。その時、絶望は希望に変わるのです。日本語の聖書で「悔い改める」と訳されている原語の意味は「方向転換する」であり、また「罪」の原語の意味は「矢が的を外して飛んでいる」です。神様という的をめがけて生きていない状態から、神様を見て生きる状態に方向転換するように、と言われているのです。

４（22-24）聖書の神様の姿　立ち返る者は全て受け入れて下さる！

しかし、人間が神様に戻ろうとしても、神様が「もう受け入れない」と言われるならどうしようもありません。しかし、この最後の部分で聞き取るべきことは、聖書の神様にどんな姿を示した者も、方向転換してこの神様の方を向いて生きようとするなら、聖書の神様は喜んで受け入れて下さるのだということです。御子イエス・キリストの出来事がそれを最も表しているのです。神様の希望との出会いです！